

# 研究ノート

## 内村鑑三と伊藤仁斎

今 高 義 也

はじめに

- 1 儒者への言及と『先哲像伝』
- 2 「大儒伊藤仁斎」をめぐって
- 3 京都時代の「夢」  
おわりに

### はじめに

内村鑑三（一八六一—一九三〇）は周知のようにイエス (Jesus) と日本 (Japan) いわゆる「二つのJ」への愛に生き、生涯「日本国自生」<sup>①</sup>のキリスト教を探求し続けた。内村においては、「日本の伝統の上に神より直接に恵まれる福音が『接木』されて『日本的基督教』を形成し、この『日本的基督教』が同時に世界的な Re-reformation を主導する普遍的使命をになうことが、期待されるにいたった」<sup>②</sup>のである。かような内村における「ナショナルリズム」の問題、換言すれば「二つのJ」の関係如何の問題は、内村研究の主要なテーマとしてあり続けてきた。

これまで、福音が接木される「台木」として内村が着眼する〈伝統〉としては、「前期」<sup>(3)</sup>の著作 *Japan and the Japanese* (民友社、一八九四年、邦題『日本及び日本人』。後に *Representative Men of Japan* 邦題『代表的日本人』として改版が刊行) に登場する西郷隆盛・上杉鷹山・中江藤樹・二宮尊徳・日蓮らの思想と実践がまず取り上げられてきた。しかしそこで描かれる〈伝統〉のイメージは、しばしば「彼が西洋から学んだピューリタン主義を日本に投射して描き出した幻影にすぎぬ」<sup>(4)</sup>ものとされ、内村が描く〈伝統〉の「台木」としての意味を疑問視する研究も多い。他方、それらを「独自の宗教的人間像」の「創出」として評価する見方や、「鑑三のキリスト教伝道のあり方の特性——いわゆる無教会主義というものは、儒者というものがその精神の奥深くにあった」として、「いわゆる無教会としてのあり方は、教会に対するアンチテーゼというよりも、日本人の精神の伝統に根差したものだ」といった方が恐らく事の真相に近<sup>(6)</sup>く、内村が聖書講義を行った今井館(後述)は「いわば伊藤仁斎の堀川巒に等しい」との見方も提出されている。小稿は、これら先学の示唆に導かれつつ、内村における伊藤仁斎(一六二七—一七〇五)の意義について、旧蔵の手沢本に見える書入れも参照しながら具体的に検証しようとするものである。

### 1 儒者への言及と『先哲像伝』

#### 儒者への言及

内村の伊藤仁斎を含む儒者への言及で、まとまりをもったものは次のごとくである。

① 「寧ろ儒者に倣ふべし」

『聖書之研究』第一八〇号、一九一五年七月<sup>(7)</sup>

② 「儒者に学ぶべし」

『聖書之研究』第一九三号、一九一六年八月<sup>(8)</sup>

③ 「A GREAT CONFUCIANT. 大儒伊藤仁齋」『聖書之研究』第二〇二号、一九一七年五月<sup>9)</sup>

①は、「我が信仰の友 源信と法然と親鸞」に続く記事として、『聖書之研究』誌上に発表された。「信仰の性質は之を源信、法然、親鸞と共にし、伝道の方法は之を仁齋、藤樹、「貝原」益軒等に習ひ、以て外国人に頼ることなくして、此国に在りてキリストを信じて彼の福音を伝ふべきである」という結びの言葉は、これら二つの文章の結論と見ることが出来る。①を発表してから一ヶ月後の八月十三日、日光への途次浄土真宗の經典『安心決定鈔』を繙き感銘を受けるなど、この時期の内村は、第一次世界大戦の勃発による西欧諸国への失望を深めると共に、形成期にあった無教会という「日本的基督教」の源流たる日本の伝統を改めて見極めようとしていたといつてよい。その基本線は、「信仰の性質」については中世の新仏教に、「伝道の方法」については近世の儒者に「倣ふべし」、というものであった。本発表が考察の対象とする儒者伊藤仁齋も、基本的には後者の文脈において取り上げられている。

参照テキスト

内村が儒者に言及する際に参照した主なテキストは、次の二冊と考えられる。いずれも旧蔵の手沢本が北海道大学付属図書館内村鑑三文庫（以下「内村文庫」）に保管されている。

- ・ 『先哲叢談』前編（原念齋）・同後編（東條琴臺）、松栄堂書店、一八九二年（原本は一八一六〈文化十三〉年）
- ・ 『先哲像伝』原徳斎、裳華書房、一八九七年（原本は一八四四〈弘化元〉年）

いずれもよく知られた近世の儒者列伝であつて、『先哲叢談』（以下『叢談』）は七十二名、『先哲像伝』（以下『像伝』）は二十名の儒者を取り上げている。前者は漢文で書かれており、後者は和文で書かれ各章の冒頭には儒者の肖像

像画が掲げられている。『像伝』の著者原徳齋は『叢談』の著者原念齋の嗣子で、『像伝』の内容は、「原念齋の業績を継承しているだけに信頼し得るもの」とされる。内村旧蔵の手沢本には、いずれにも朱筆による書入れが多く見られる。入手と書入れの時期はいずれも不詳であるが、前記①②③の執筆にあたり、内村が『像伝』を参照していることは間違いないと思われる（その照合は後述）。そこでまず、旧蔵『像伝』所収の「伊藤仁齋」テキストと、そこに見える書入れを確認しておきたい。

### 旧蔵『先哲像伝』に見える書入れ

「伊藤仁齋」は『像伝』巻二にあり、中江藤樹・山崎闇齋・熊沢蕃山に続く四人目として登場する。以下はその全文である。傍線、欄外数字、チェックマーク「レ」は、すべて赤鉛筆による書入れを示す。尚、波線は引用者によるもので、後に検討する儒者への言及の際に踏まえられているとみられる箇所である。

仁齋伊藤氏、名は維貞、字は源祐、初の名は源吉と云ふ、仁齋と号し、また古義堂と称す、外に棠隱、桜隱の号あり、京師の人、その先は泉州の住なり、家もと商賈なり、仁齋は寛永四年七月廿日に生れ、幼時句読を習ふ時、すでに儒をもて一世に鳴らんと志す、親戚医を勸る者あれども随はず、自ら刻苦して性理学を修む、年三十七八の頃より宋儒の説を疑ひ、是より程朱を排斥して古学を唱へ、門戸を開き、堀川に住して堀川学と称するに至り、生徒刺を投じて来学する者数をしらず、肥後侯その名行を欽慕して、禄千石をもて聘すといへども、老母の侍養人なきをもて、辞して仕へず、生涯処士をもて終る、利禄に移されざる斯の如し、故をもて年五十八の頃

まで、家道甚薄かりしとぞ、然れども遂に一代の儒宗となり、国として門人あらざるはなく、たゞ飛驒佐渡壹岐  
 この三国の人來学せざるのみとぞ、其盛んなる比類なし、宝永二年三月十二日卒す、享年七十九、小倉山に葬  
 る、私諡して古学先生といふ、

○仁斎は世儒の異様を好むに似ず、節分の夜は礼服を着して万声にて豆をまき、また仏の地を過れば、必其本尊  
 を拜し、また近隣のひと義井を浚ふ事あれば、同じく出てこれを助けなどせし、すべて其人となり物やはらか  
 に、愛相よく、謙退深く有りとぞ、

○仁斎の歌に

前庭を詠めて

風わたる竹の枯葉をそのまゝに梢にとむるさゝがにの糸

七夕

さかしらに誰がいひ初めて七夕のこよひなき名の空にみつらん

月をながめて

レ 代々を経て詠めし人の教にまた我をもゆるせ秋の夜の月

戒慎恐懼の念を

レ 思ひとれば此身の外に道もなし身を守るこそ道をしるなれ

○仁斎の性質は酒を好まず、故に新年の詩句に平生不善酒、一盞即訓前醺然と作れり、また義士小野寺十内と交  
 り厚く、其母九十の寿を賀する詩あり、其詩に、

母氏年高九十彊。無憂無病又無傷。老萊孝思誰能識。膝下猶呼為小郎。  
また大石良雄も仁齋の門に学ぶ、

○仁齋著書目に

論語古義

孟子古義

中庸發揮

大学定本

童子問

語孟字義

古学先生集

大極論

大学非孔氏之遺書弁

春秋經伝通解

周易乾坤古義

読近恩録抄

仁齋日礼

送水野侯国字序

和歌集

文式

性善論

心学原論

○仁齋の事歴は、東涯撰する古学先生行状記、其外諸書に委し、北村可昌撰べる墓碑銘に、

先生諱維禎、字源佐、号仁齋、姓伊藤、洛陽人、自幼不凡、既長好宋儒理性之学、後疑宋儒非聖人正統、大学書非孔氏遺書、及明鏡止水冲漠無朕等說皆出於老仏、直以論孟教授、最善講說、發揮聖意勸誘學者、詳悉審明、親切著実、如尋常語、聽者驚動多所奮勵、從遊者繼于門、其文也思致確実、議論深長、不用綺字、不見艱澁、每一篇出、四方争伝、对州医生齋掃流伝朝鮮、慶州府尹見而歎曰、旨新文佳、不意日本有斯人、其性也寛厚和緩、不見憤怒、剪徹厓幅、於物無抵、無貴賤少長愛而周之、雖粗鄙暴悍者一再相見則未有不薰然而心醉焉、家又屢空、而処之恬然未嘗覺其不足也、先丁妣孺人憂服菴、尋服考府君喪三年、著論孟古義十七卷、中庸發揮大学定本共一卷、論孟字義二卷、童子問三卷、文集三卷、詩集一卷、娶緒方氏、後娶瀬崎氏、五男三女、

皆能研家学、嫡長胤、最明穎善文、寛永丁卯七月廿日生、宝永乙酉三月十二日卒、年七十九、葬于小倉山先塋之次、私諡曰古学先生、嗚呼悲哉、銘曰、

先生高尚、不近利名、洙泗正統、本邦主盟、

無一時用、有千載榮、学耶德耶、日月双明、

前半、仁齋小伝にあたる部分の書入れは、①仁齋の生没年月日と没年の西暦（一七〇五年）、②生涯「利禄」に動かされずに「処士」を貫いた生き方、③弟子の広がり象徴する全国的な影響力、への着眼を示す。中盤における「仁齋の歌」では、「代々を経て詠めし人の数にまた我をもゆるせ秋の夜の月」「思ひとれば此身の外に道もなし身を守るこそ道をしるなれ」の二つにチェックマークが付され、「仁齋著書目」には一箇所、『大学』が孔子の遺書ではないことを論証した「大学非孔氏之遺書弁」に傍線が引かれている。

後半の墓碑銘の漢文には三箇所傍線がみられる。「其文也思致確實、議論深長、不用綺字、不見艱澁、每一篇出、四方争伝」は、「思致確實にして、議論深長」にもかかわらず「綺字を用いず」に平易な言葉で「直ちに論孟を以て教授」する仁齋の学問の性格を示し、「家又屢空、而处之恬然未嘗覺其不足」は、窮乏の中でも「恬然」として「不足」を覚えたことがなかったという仁齋の生活態度を示す箇所。末尾の漢詩の後半「無一時用、有千載榮、学耶德耶、日月双明」は、仁齋の「学」と「徳」とを二つながら賞賛する銘である。

以上、『像伝』の書入れ箇所について概観したが、以下、この『像伝』を参照しつつ書かれたと思われる前述の資料①・②について、仁齋に関する記述を中心にみていきたい。

## 「寧ろ儒者に倣ふべし」

① 「寧ろ儒者に倣ふべし」(抄録、太字は原文のまま、傍線は引用者による)

而して我国にも亦真儒なる者があつた、石川丈山、中江藤樹、山崎闇斎、伊藤仁斎等、皆な自由独立の人民の教師であつた、身は貧に在りながら諸侯の招聘を受けて「侯道を問はんと欲せば則ち先づ来り見るべし」と答へた闇斎は誠に教師らしき教師であつた、**A** 肥後侯祿千石を以て招きしと雖も之を辞し京都の堀川に私塾を開き、天下の学生を集め、生涯処士を以て終りし仁斎はサクソン大公の保護の下にヴィテンベルグ大学に神学を講ぜしルーテル以上の独立の士であつた、湖西の小川村に一村夫子として光を天下に放ちし藤樹は、西走東奔に日も亦足らず、旅程の長きを伝道会社に報告して其賞讃に与からんとする、今の所謂福音士をして慚死せしむるに足るではない乎。

儒者は儒教を以て立つた、其經典は所謂四書五經であつた、彼等は之を以て身を修め國を治めんとした、恁くして彼等も亦書籍の人であつた 寺院を造らず、祭壇を飾らず、唯經書にのみ頼り、之を以て民を救はんとした、而して彼等は彼等相応に其事業に於て成功したのである。

キリストの福音を以て立ち、聖書の研究に身を委ね、其の伝播を以て業とする我等も亦書籍の人であつて儒者と階級を同じうする者ではない乎、然らば我等は何故に儒者に倣ひて我等の目的を達することが出来ない乎、儒者は東洋人の教師である、而して東洋人に福音を伝へんと欲する我等は福音的儒者として立つべきではないか、**B** 我等は仁斎の堀川巖に倣ひ、教会に由らざる自立の聖書学校を起すべきではない乎、我等は藤樹に倣ひ、教会、伝道会社等の俸給を受くることなくして純乎たる独立の村落伝道者たるべきではない乎、我等聖



書に在りてキリストに頼る者、何故に此世の権者に對し閻齋の如くに毅然たり得ざる乎、誠に儒者に倣ふは宣教師に倣ふよりも遙かに高貴である、(中略) 儒者が寺院と神社に頼らざりしが如くに我等も亦教会に頼るべからずである、儒者は其書齋に籠りて天下を教へた、我等は何故に我等の聖なる密室 (sanctum) に籠りて聖書と祈祷とを以て国民を導き得ないのである乎、(中略) <sup>C</sup> 我等は聖められたる儒者として、仁齋藤樹の迹を踐み、剛毅、独立、能く空乏に堪へ、富豪の門で出入せず、権者の援を藉りず、自ら信者を作らんとせずして人の我が信仰を求めて来るを待ち、士としての品性を維持しつつ神の栄光を顯はすべきである。

ここに見られる内村の仁齋像を整理しておく。(1) 「独立の士」仁齋。傍線部 A 「肥後侯禄千石を以て招きしと雖も之を辞し」「生涯処士を以て終りし」は、『像伝』テキストの「肥後侯その名行を欽慕して、禄千石をもて聘すといへども」、「辞して仕へず、生涯処士をもて終る」に基づくとみられる。「処士をもて終る」という一節は、『叢談』テキストには見えない表現である。内村は「利禄に移され」『像伝』ない仁齋の生き方を「ルーテル以上の独立の士」として称える。(2) 「書籍の人」仁齋。内村は「我等は仁齋の堀川巽に倣ひ、教会に由らざる自立の聖書学校を起すべきではない乎」(傍線部 B) と述べ、仁齋の私塾「堀川巽」が諸侯や寺院・神社の支援を受けることなく「独立」していたこと、また仁齋をはじめとする儒者らが「寺院を造らず、祭壇を飾らず、唯経書にのみ頼り」、「書齋に籠りて天下を教へた」「書籍の人」であったと強調する。

「儒者に学ぶべし」

② 「儒者に学ぶべし」も①とはほぼ同じ主旨の文章といつてよい。その全文は次の如くである。

我等キリストの福音は之を彼等外国宣教師より学ぶも可なりである（彼等が眞の福音を伝ふる場合には）、然れども福音を我国人に伝ふる方法は、之を宣教師に学ばずして寧ろ我国の儒者又は高僧に学ぶ、<sup>D</sup>生活の獨立を維持してと五十八に至るまで貧生活に安んぜし伊藤仁斎は今の多くの宣教師に愈るの人物であつた、身は江都に在りて賃居するの際、諸侯の招聘する所となるも応ぜず「侯欲問道則先來見」と曰ひて毅然として自ら守り、諸侯をして礼を尽して其貧居を訪はしめし山崎闇齋は優に今の基督教の教師に愈る数等の教師であつた、<sup>E</sup>道を伝へんと欲する我等に仁斎闇齋らの獨立と威權とが無くてはならない。

傍線部Dは、『像伝』の「年五十八の頃まで、家道甚薄かりしとぞ」を踏まえた記述である。「道を伝へんと欲する我等に仁斎闇齋らの獨立と威權とが無くてはならない」(②傍線部E、傍点引用者)という主張は、前に引いた「我等は聖められたる儒者として、仁斎藤樹の迹を踐み、剛毅、獨立、能く空乏に堪へ、富豪の門で出入せず、権者の援を藉りず、自ら信者を作らんとせずして人の我が信仰を求めて来るを待ち、士としての品性を維持しつつ神の栄光を顯すべきである」(①傍線部C、傍点引用者)と重なる。かように、伊藤仁斎と並んで中江藤樹・山崎闇齋が倣うべき「獨立の士」として紹介されるのだが、このように三者を列記する書き方からすると、藤樹・闇齋に比して殊更に仁斎を重要視する妥当性も問われねばなるまい。そこで次に③「大儒伊藤仁斎」の内容を検討し、内村にとっての

仁齋の意味を改めて考えてみたい。

## 2 「大儒伊藤仁齋」をめぐって

「大儒伊藤仁齋」

「A GREAT CONFUCIANIST. 大儒伊藤仁齋」は伊藤仁齋を紹介し論じた和訳付英文である。『聖書之研究』第二〇二号（一九一七年五月）において発表されたもので、短文ではあるが、「大儒」として仁齋を取り上げた文章として注目される。その全文は次の如くである（傍線は引用者による）。

### A GREAT CONFUCIANIST.

Jinsai Ito was a Japanese Confucianist of two hundred years ago. He lived in Kyoto, and never moved from his place, but students flocked to him from all parts of Japan at that time of difficult traveling. He called no man his master; rejected all offers of rich daimyos to be made their tutor, so was poor all through his life. Withal he was genial, mingled with the common people; and himself a layman and commoner, was at the same time the nation's teacher. Great Jinsai! I would rather imitate him than hundreds and thousands of modern Christian teachers who are constantly moving to make convents of heathens, and that by the expense of churches and societies patronized by worthless millionaires!

大儒伊藤仁斎

伊藤仁斎は余の会心の儒者である、彼は今より二百年前の人、京都堀川に住し、自から出ることなくして天下の学徒を自己の膝下に引附けた、曰く「国として門人あらざるなく、たゞ飛騨 佐渡 杵岐の人 来学せざるのみ」と、仁斎は又独立の人であった、官に仕へず、諸侯の招聘に應ぜず、故をもて年五十八の頃まで家道甚だ薄かりしと云ふ、彼は又自身が商家の子なりしが如く終生平民の友であった、

代々を経て眺めし人の数にまた

我をもゆるせ秋の夜の月

此歌を詠ぜし彼は学位尊称に身を飾りて喜ぶが如き人ではなかった、而かも彼は国民の大教師であった、彼れ以後の儒者にして直接間接に彼の感化を蒙らざる者は無った、日本国が彼に負ふ所は多大である、偉大なる哉仁斎、余は彼に学んで、卑き富豪の庇保の下に存立する教会伝道会社の補助を受けて信徒の製造に奔走する現代多数の基督教の教師等に倣はざらんと欲す。

「伊藤仁斎は余の会心の儒者である」という書き出しが示すように、全体として和文の方が仁斎への敬愛の情の表出がみられる。「国として門人あらざるはなく、たゞ飛騨佐渡杵岐この三国の人来学せざるのみ」年五十八の頃まで、家道甚薄かりし「代々を経て詠めし人の数にまた我をもゆるせ秋の夜の月」（傍線部）は、『像伝』からほぼ異同無く引用されたものであることがわかる。「今より二百年前の人」に、『像伝』に見える没年の西暦を確認する書入れ（「1703」）が反映しているのも見易いだらう。「彼は又自身が商家の子なりし」には、同じく『像伝』の「家もと商賈

なり」が反映している。かくして「大儒伊藤仁齋」は、ほぼ全面的に『像伝』テキストに拠って書かれたものとみてよい。

ここでもやはり権力者・富裕者に頼らない「独立の人」(He called no man his master)としての仁齋がまず称揚される。また、「京都堀川に住し、自から出ることなくして (never moved from his place) 天下の学徒を自己の膝下に引附けた」ことに仁齋の偉大を見る点も、①「寧ろ儒者に倣ふべし」で述べられていた「書籍の人」としての仁齋評価と通底する。

「大儒伊藤仁齋」において注目すべきは、「平民の友」(a layman and commoner)としての仁齋への注目であろう。英文では省略されているが、内村はその和歌「代々を経て詠めし人の数にまた我をもゆるせ秋の夜の月」を引用して、生涯「処士」として生きた仁齋への同情と共感を表している。<sup>(1)</sup>これに関連して、同じく『像伝』テキストに書入れ(チェックマーク)のある「戒慎恐懼の念を」と題された和歌「思ひとれば此身の外に道もなし身を守るこそ道をしるなれ」にも注目しておきたい。これは、「人道を以て人に教ふる者」(『叢談』手沢本における傍線書入れ部分)との自覚に立つ仁齋の学問が、決して抽象的な思弁の学ではなく、具体的な「人倫日用」のあり方を問う――「此身の外に道もなし」――「人間学」であることへの、内村の鋭い着眼を示唆するものではあるまいか。引用は省略するが、『叢談』テキストに見える書入れにも同じことを暗示すると思われるものがあり、その仁齋学への共鳴が「而かも彼は国民の大教師であった、彼れ以後の儒者にして直接間接に彼の感化を蒙らざる者は無った、日本国が彼に負ふ所は多大である」という仁齋評につながっているものとみられる。

以上「中期」の内村における儒者への言及、および仁齋像を『像伝』テキストと照合しつつ検討した。最後に次節

で、仁斎との関わりの出発点ともいえるべき京都時代（「前期」の前半にあたる）の事跡について検討し、結びとした。

### 3 京都時代の「夢」

#### 京都時代の内村と古義堂

一八九六年一月十四日付 D・C・ヘル宛書簡<sup>(12)</sup>において、内村は次のように述べている（下線は引用者による）。

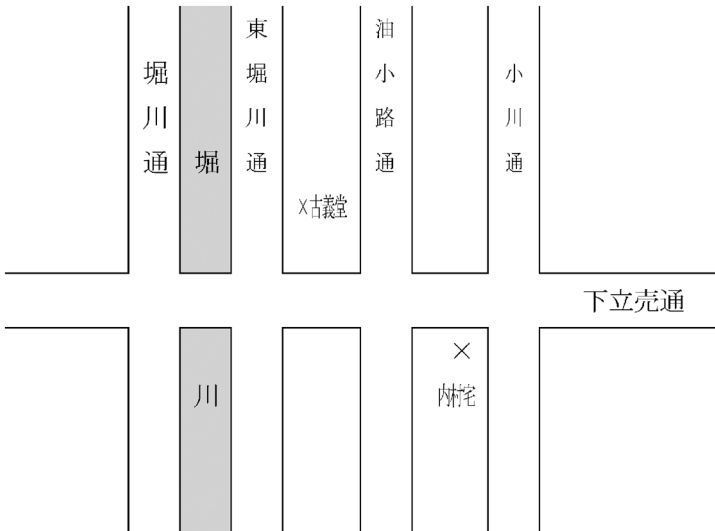
My urgent prayer just at present, is for a cozy little house wish a small lecture room and a library attacked to it. I know of many who expressed their wish to stay with me six months or so, studying Bible and my "Orthodox from of Christianity", which, by the way, is now a rare thing in Japan, outside of missionary circles. I may give them one lecture a day, and such helps and suggestions as they need. My little library of 150 volumes, (swelled by many of your own contribution) will from the nucleus of this incipient "Biblical Institute". I have an industrious bookseller of Kyoto to back me in such a work... "The Kyoto Biblical Institute; President, Kanzo Uchimura, — patrons; Hon. David C. Bell, Rev. Edwin S. Williams, etc. etc." — do they not sound good? O Dreams, Dreams! ...Thanks God, my special line of work in this world seems now to be almost settled. I now know a work wherein I can serve my God, my country, my fellowmen, and myself at the same time. I hope by His help, to stay in it forever, whatever may the outward circumstances be. Let me have more of your prayers for steadfastness in

my calling.

新保祐司『内村鑑三』は、「下立売小川西入ルの鑑三の住所から、伊藤仁斎の古義堂が、ほんの歩いて一、二分のところ」にあったことから、この書簡の一節（一行目の下線部、「小さな講堂一つと図書室一つ〈a small lecture room and a library〉をもつ、ささやかな小屋をもちたい」）に注目して、この書簡が書かれたのは「古義堂を見てきた後かとも思われる」と指摘する。<sup>13)</sup> 古義堂（堀川通り出水下ル）と前述の内村宅の位置関係を示せば、次の如くである（図①）。

この書簡を書いた当時、内村は「キリスト教月曜学校」を前年の十二月から長老派の教会（船岡弘毅の京都教会と推定される）を会場にして始めたばかりだった。月曜学校は「生徒は約二〇人、月曜日の午後六時から、三か月を一学期として聴講料五〇銭をとって開かれた」<sup>14)</sup>もので、前掲書簡（一八九六年一月十四日付ベル宛）では生徒の増加を

図① 京都時代の内村宅と古義堂



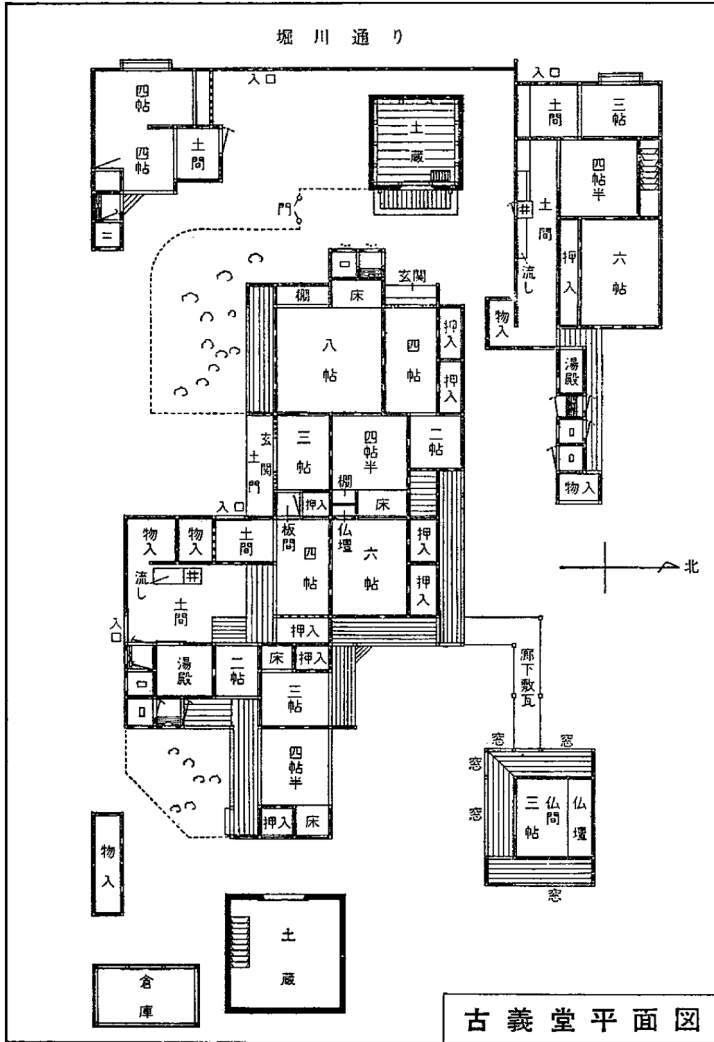
報告し、内村を所長とする「京都聖書研究所」(The Kyoto Biblical Institute; President, Kanzo Uchimura)を設立するといふ「夢」を語っている(“O Dreams, Dreams!”)。けだしこの〈聖書研究所に拠る伝道〉という構想は無教会の源流といふべきもので、新保説のごとく、仁斎の古義堂がその範となったことは十分あり得ることと思われる。前節に引用の資料②「寧ろ儒者に倣ふべし」に示されていた、「我等は仁斎の堀川蠻に倣ひ、教会に由らざる自立の聖書学校を起すべきではない乎」という構想は、すでに京都時代に胚胎していたとみたい。

伊藤仁斎宅址と書庫が史蹟に指定された一九二二年当時の書類によると「仁斎没後享保十八年その子東涯これを改築せしも、爾後火災に罹りてしばしば更新せられ、現今の建物は多く明治二十三年の建造に係る。伊藤仁斎当時のものとしては二階建書庫一棟を存す」という<sup>15)</sup>。その平面図は次の如くであった(図②)<sup>16)</sup>。

一九〇七年、内村宅の隣に建てられた、京都時代の「夢」の実現ともいふべき今井館は、当初「聖書講堂と教友の宿泊所の二棟から成り、それぞれ、八畳と六畳、一〇畳と八畳の二間」という間取りであった<sup>17)</sup>。「中期」の内村が儒者に繰り返し言及し、仁斎を「大儒」として紹介したことは、無教会の伝道形態が定まりつつあった当時、「日本国自生」の聖書研究者＝独立伝道者としての自己の「召命」(calling)を改めて確認する作業でもあったのではなからうか。



図② 古義堂平面図



## おわりに

「中期」の内村鑑三は、「日本的基督教」としての無教会の聖書研究と独立伝道において、古義堂における伊藤仁齋の方法的継承者たらんとしていた。その原点は、不敬事件後の窮乏生活の中で「聖書研究所」の開設を夢見つつ「月曜学校」を開講していた京都時代に遡るとみられる。

内村のこのような仁齋への着眼はけだし偶然ではない。生涯「処士」を貫き、「性理の学」たる朱子学の思弁性を廃して現実の「人倫日用」を重視し、論語・孟子に立ち返ってそれらを具体的な「人間学」のテキストとして読み直した「日本的儒学」<sup>18</sup>。「古義学」を創始した仁齋。その学問的思想的業績に対する理解の深淺はともあれ、西欧近代の神学を忌避して「旧き福音」の全人格的把握を重んじ、信徒による聖書研究と独立伝道を展開する無教会<sup>19</sup>。「日本的基督教」の形成を指そうとしていた内村が、自らの連なる「伝統」としての仁齋<sup>20</sup>古義堂に意を強くしたとしても不思議はないだろう。実際、両者の思想の間には興味深い類同性を認め得るように思われる。いずれにせよ、右に述べ来たったような「仁齋受容」が内村においてあったとすれば、それは「西洋から学んだピューリタン主義を日本に投射して描き出した幻影」というよりも、むしろ自らが連なっているところの「台木」<sup>21</sup>。「伝統」の自覚的継受を示唆するものとみるべきではなからうか。

## 〈注〉

(1) 「我が信仰の表白」、『六合雜誌』一三二号、一八九二年十一月十五日、『内村鑑三全集』第一卷(岩波書店、一九八一年)、

二一八頁（以下『全集』一・二一八と略記）。

(2) 松沢弘陽「内村鑑三の歴史意識（二）」、『北大法学論集』第十七卷第四号、一九六七年二月。

(3) 本稿で使用する「前期」ならびに「中期」の用語は、私見であるが内村の生涯の次のような時期区分に基づくものである。

「初期」 出生から不敬事件前後まで（一八六一—一八九二）

「前期」 窮迫時代から『東京独立雑誌』廃刊まで（一八九三—一八九九）

「中期」 『聖書之研究』創刊から無教会の形成期まで（一九〇〇—一九一七）

「後期」 再臨運動から召天まで（一九一八—一九三〇）

(4) 家永三郎『近代精神とその限界』、角川新書、一九五〇年、一四九頁。

(5) 鈴木範久「解説」、内村鑑三『代表的日本人』（一九九五年、岩波文庫）二〇二頁。

(6) 新保祐司『内村鑑三』、構想社、一九九〇年、一八六—一八八頁。

(7) 『全集』二二・三四五—三四八。

(8) 『全集』二二・三九八。

(9) 『全集』二三・二三〇—二三一。

(10) 田中佩刀「序」『影印版 先哲像伝（全巻）』文化書房博文社、一九八〇年。

(11) 『像伝』の「詠めし」が、「大儒伊藤仁斎」では「眺めし」となっている。

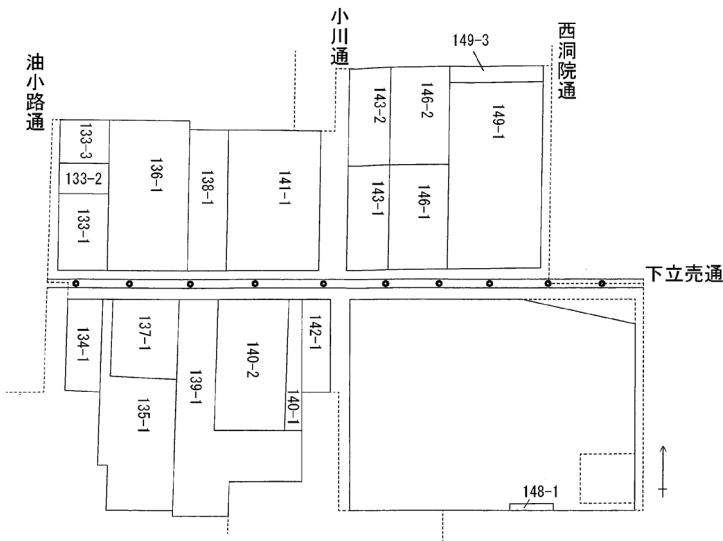
(12) 『全集』三六・四三二—四三三。

(13) 前掲新保『内村鑑三』、二六九—二七〇頁。なお『基督教新聞』紙上には「上京区下立売小川西大路町五番」と報じられている（鈴木範久『内村鑑三日録一八九二—一八九六 後世に遺すもの』、教文館、一九九三年、九八頁）。内村の居住地「西大路町」（にしおおじちょう）とは、「江戸期—現在の町名。下立売通油小路東入の町、小川通下立売上ル東側また下ル西側ニ係ル、油小路通下立売上ル東側の町」（『角川日本地名大辞典』二六京都府上巻、角川書店、一九八二年、一〇七

一頁)で、現在も「下立売通油小路東入。下立売通の南北に沿う両側町で、西洞院通から油小路通に至る」(『角川日本地名大辞典』二六京都府下巻、角川書店、一九八二年、一八九頁)地区をいう。内村居住当時からやや年月は下るが、大正元年時点での西大路町の地籍図は次のごとくである(図③、『京都市及接続町村地籍図』第一編上京之部、京都地籍図編纂所、一九二二年十月)。

「西大路町五番」という内村宅が、「下立売通小川西入ル」の南北いずれの側にあつたのかは不詳だが、京都時代の内村の厳しい経済状況と敷地の規模から推して南側の一軒目(一四二―一)の可能性が高いのではないかと思われる。現在ここには創業一八九七年という京飴の老舗「いしざき」が店を構えている。なお、引用したD・C・ベル宛書簡が書かれた一八九六年一月十四日当時、内村はすでに西大路町から新町通竹屋町の便利堂に居を移していたとみられる(前掲鈴木『内村鑑三日録一八九二〜一八九六 後世に遺すもの』、一六五頁)。

(14) 前掲鈴木『内村鑑三日録一八九二〜一八九六 後世に



図③ 西大路町の地籍図(一九二二年十月)

遺すもの』一六七頁。

(15) 貝塚茂樹「日本儒教の創始者」、『伊藤仁斎』（日本の名著13）、中央公論社、一九八三年、七頁。

(16) 同前、六頁。貝塚は更に次のような聞き書きと所感を記している。「先代末亡人の談によると、四畳の次の間につづいて床つきの八畳の南面した座敷が仁斎の居間で、ここで仁斎は読書し、また定まった日に弟子たちと読書会を開いていたのである。仁斎の門弟は三千人に上り、天下の儒学に志すもの十人に七人までは古義堂派に属するといわれた盛況は、この遺構からは想見しがたいように見える。だが、この小さい建物こそ決して門戸を張らない謙讓な伊藤仁斎の人格がそのまま現れているようである」（同前、八頁）。古義堂を訪れた内村も貝塚と同じ感慨を抱き、自らもかありたいと念じたのではあるまいか。

(17) 鈴木範久『内村鑑三日録 一九〇八〜一九二二 木を植えよ』、教文館、一九九五年、三六頁。

(18) 石田一良『伊藤仁斎』（吉川弘文館、一九六〇年）には、次のような指摘が見える。

仁斎学の根本原理である仁とは愛であるが、愛とは人の具体的な作用形式や生活状態に向う叙事詩的な敬・義と異なり、なんら外的な組織原理ではなく、各々の存在の異同をそのまま、それを越えて互いに融和し一体となり、自他不二の心境を現成する叙情詩的な心の動きであるといえよう。即ち敬義が統一への意志を含むとすれば、仁愛は自由への志向をもつといえる。そして朱子学が義と敬に分を関係させたのに対し、仁斎は仁と愛には讓を関係させる。分が不平等者間の結合原理とすれば、讓は平等者間のそれであろう。（中略）従って敬・義・分の上に成立する共同社会が力の分配構造であるのに対して、仁・愛・讓の上に形成される共同体には成員の同格関係がある。勿論、愛の共同体においても、その中心にいる聖人には他の凡俗を超えた指導的な中心的位置があるが、聖人の仁・愛・讓の美德に覆われた全体はあくまで同様の強調点をもった人物の並列関係で構成されることになる。従って仁斎の理想郷である王道楽土は政治と権力と制度の全く存在しない所であるのは当然であろう。（二四二―二四三頁）

かような自由な平等者間の叙情詩的な心の動きとしての「仁愛」を根本原理とする仁斎学の非政治性・非制度性は、内村の

無教会主義と構造的に通ずるものがあるように思われて興味深い。

〔付記〕 本稿は、二〇一〇年六月十九日、宮城学院女子大学で開催された日本基督教学会東北支部学術大会における研究発表原稿をもとに作成したものです。学会当日に諸先生方から賜った貴重なご指摘ご助言に感謝いたします。また、貴重な資料の閲覧と複写をお許しくださった北海道大学附属図書館、京都府立総合資料館にこの場を借りて感謝申し上げます。